第 234 回　京都市考古資料館講座

－シリーズ『清盛の時代』第2回－　　2012 年 2 月 25 日

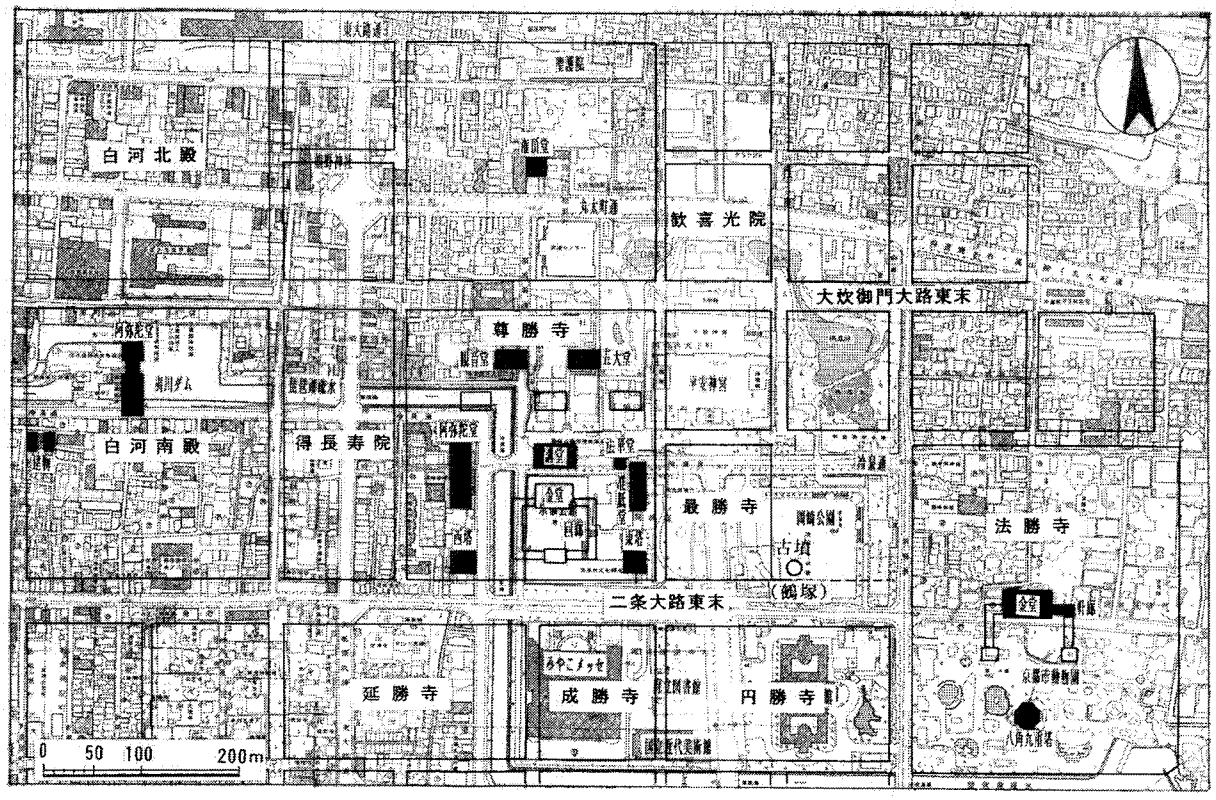
白河・六勝寺

(財)京都市埋蔵文化財研究所　梶川　敏夫

1 概　説

院政期(11～12 世紀)の京は、平安京を離れ、鴨東の白河の地に六勝寺と呼ばれる巨大建築群が出現した。現在の京都市左京区の岡崎公園一帯から西方の鴨川にかけて、独自の区画をもつ白河街区と呼ばれるエリアに、寺院群や院の御所・御堂などが相次いで建立された。その中でも、天皇家の御願寺で、法号に「勝」の字がつく、特に格の高い六つの寺院を総称して六勝寺(りくしょうじ)と呼ばれた。

六勝寺（このほかに数多くの寺院や別業があった）			
寺・院御所名	天　皇	供養等の年代	推 定 場 所
法勝寺	白河天皇	承暦元年(1077)供養	京都市動物園とその北方一帯
尊勝寺	堀川天皇	康和4年(1102)供養	京都会館付近から疏水付近一帯
最勝寺	鳥羽天皇	元永元年(1118)供養	岡崎グランド及び西方付近
円勝寺	待賢門院	大治3年(1128)供養	京都市美術館付近から府立図書館付近
成勝寺	崇徳天皇	保延5年(1139)供養	みやこメッセ付近
延勝寺	近衛天皇	久安5年(1149)供養	みやこメッセの西・疏水から東大路通付近
［その他］			
白河南殿	白河上皇	嘉保2年(1095)	疏水事務所・夷川ダム付近
白河北殿	白河上皇	元永元年(1118)	京都大学熊野寮付近
得長寿院	鳥羽上皇	長承元年(1132)供養	川端警察署付近



左京区岡崎の六勝寺ほか推定復元図（発掘調査成果により推定場所が変化する場合がある）

2 院 政

(1) 院政とは…平安時代後期から鎌倉時代にかけて、在位する天皇の直系尊属である太上天皇（上皇・法皇）が実権を握り、天皇に代わって院庁において政務を直接行う政治形態で、上皇は「治天の君」とも呼ばれた。一般的に院政と呼ばれる時代は、平安時代後期の白河上皇が堀河天皇を東宮に立てた1086年から、後鳥羽上皇が鎌倉幕府から政権を奪回しようとして起した1221年の承久の乱頃までをさす。

(2) 院政のはじまり…後冷泉天皇の次に即位した後三条天皇(1034～1073)は、それまでの摂関政治とは違って、藤原北家（摂関家）を外戚に持たず、荘園整理などの政策を実行した。その後を継いだ白河天皇は、応徳3年(1086)にわずか8歳の堀河天皇に譲位し、幼帝を後見するために白河院と称して政務に当たった。1107年に堀河天皇崩御の後も鳥羽天皇が4歳で即位し、その後見も行ったことから治天の君といわれた。

(3) 成功（じょうこう）…律令制位階制度→その位によって仕事が決まり祿(給料)を貰うのが原則であるが、律令政治の財政が崩れていくと、六位以下の中級・下級の貴族たちには祿が支払われなくなり、上級貴族の家政職員など私的な主従関係に変化して行った。彼らが院庁と呼ぶ上皇の家政機関に勤めた場合は、「院近臣」となって院を支え政治にも関与するようになり、六位以下の官位等は成功の対象になる。この成功とは朝廷が位階などを売ることで、当時は官位・官職は形骸化し、それに伴う報酬などは無いのが基本で、ステータスとして需要であった。この「成功」は院政期の国家財政を支える柱の一つになり、受領層が天皇や上皇などのために大規模な寺院建立や造仏を行って寄進、その見返りに国司などの重任が横行した 。

(4) 御願寺

天皇の御願で建立する寺院のことで、平安時代に盛行した。奈良時代の官大寺とは異なり、天皇家を檀越(だんおつ→経済的支援者)とする皇室の私寺として営まれ、天皇譲位後の居所としての性格も備えていた。天皇の御願のほか、上皇、皇后、親王等にも用いられ、貴族や僧侶の建立した寺院をさす場合もある。特に平安京近辺に集中し、代表的なものに山陵に接して建立された仁和寺、醍醐寺、比叡山延暦寺の定心院・妙香院のほか、仁和寺の近くに建立された円融天皇御願の円融寺をはじめとする四円寺(円教寺・円乗寺・円宗寺)そして、院政期の象徴ともいえる鴨東白河の六勝寺や城南の鳥羽殿などに建立された諸寺がある。

院政期の天皇と后

歴 代	天 皇（生没年）	中宮など
71代	後三条天皇（1034～1073）	藤原 茂子
72代	白河天皇　(1053～1129)	源 賢子
73代	堀河天皇　(1079～1107)	藤原 苡子
74代	鳥羽天皇　(1103～1156)	藤原 璋子・藤原 得子
75代	崇徳天皇　(1119～1164)	藤原聖子
76代	近衛天皇　(1139～1155)	藤原呈子
77代	後白河天皇（1127～1192）	藤原 忻子（きんし）
78代	二条天皇　(1143～1165)	伊岐致遠の娘（早世）
79代	六条天皇　(1164～1176)	早世
80代	高倉天皇　(1161～1181)	藤原 殖子・平 徳子
81代	安徳天皇　(1178～1185)	早世
82代	後鳥羽天皇（1180～1239）	源 在子・藤原 重子

3 六勝寺

慈円（じえん）(1155～1225)の著した『愚管抄（ぐかんしょう）』には「白河ニ法勝寺タテラレテ　国王ノウジデラニ　コレヲモテナサレケルヨリ　代々ミナコノ御願ヲツクラレテ六勝寺トイフ…」とあり、当時から六勝寺と呼ばれていたことが分かる。

この六勝寺には、法勝寺の巨大な八角九重塔や毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）を安置した金堂、現在の蓮華王院（三十三間堂）の原形で、丈六観音像の両脇に500躰（たい）ずつ一千躰の聖観音像を安置した得長寿院（とくちょうじゅいん）や、敷地が二町四方もある院の御所など、大規模建造物が甍（いらか）を競って林立していた。

これらの多くの建物は、院への権力集

中により受領層（各国に赴任するの守→長官）の力により造営されていったが、その見返りとして、位階授与などの恩賞や同じ任国の国司への重任など、成功と呼ばれる様々な利点があった。

しかし、六勝寺はその巨大さゆえに、人災・自然災害を含めて維持・管理・再建が困難となって衰退し、応仁・文明の乱で大きく罹災して以後は、地上から姿を消して田畑と化し、跡地は不詳となってしまった。

京都市左京区岡崎地域一帯は、明治期に入ってから琵琶湖疏水開削のほか、明治28年(1895)には第四回内国勧業博覧会の会場となり、明治36年(1903)には日本で2番目の動物園が誕生、その後も大正天皇即位大礼の大典記念京都博覧会や昭和天皇御成婚奉祝万国博覧会など、岡崎を主会場に開催されている。第二次大戦後は、岡崎付近一帯にあった公共施設等は占領軍が接収し、占領拠点として活用された。その後、跡地は整備されて現在のような岡崎動物園・京都市美術館・国立近代美術館・府立図書館・勧業館(みやこメッセ)・京都会館など、公共施設が林立する岡崎文化ゾーンに変貌した。

このような時代の流れのなかで、いつしか衰退・廃絶し、地上から消した院政期の巨大建築群も、1959年の京都会館建設に伴う発掘調査を皮切りに、これまで数多くの発掘調査が実施され、その調査成果から六勝寺の復元が試みられてきている。

4 六勝寺ほかの推定場所

六勝寺のあった場所は、現在の京都市動物園が法勝寺境内（推定二町四方以上）の南半で、動物園の北、二条通り北側に現存する約2mの石垣が積まれた高台が法勝寺の金堂基壇跡である。岡崎グラント西側付近から京都会館にかけては最勝寺跡（推定一町四方）、京都会館から琵琶湖疏水を中心とした尊勝寺跡（推定二町四方）、美術館から府立図書館付近が円勝寺跡（推定南北一町、東西二町））、みやこメッセ付近が成勝寺跡（推定一町四方）、その西方の疏水を越えた辺りが延勝寺跡（推定南北一町、東西二町）と想定されている。さらに、その西方の東大路通二条上る付近には得長寿院（東西一町、南北二町）、その西側に白河南殿（二町四方）、その北が保元の乱（1156）の舞台となった白河北殿（二町四方）と推定され、そのほか白河街区内には、多くの寺院やそれに付属する建物が建ち並んでいた。

六勝寺復原イラスト(南から)

白河街区には、六勝寺や白河南殿・白河北殿・得長寿院のほかに、宝荘厳院（長承元・1132）・善勝寺（応徳4年・1087）・聖護院（寛治4年・1090）・熊野神社（康和5年・1103）・蓮華蔵院（永久2年・1114）・三条白川房（保安4年・1123）・証菩提院（大治4年・1129）・観喜光院（永治元年・1141）・金剛証院（康治元年・1142）・白河押小路殿（康治元年・1142）・福勝院（仁平元・1151）等が建ち並んでいた。

5 六勝寺の復元

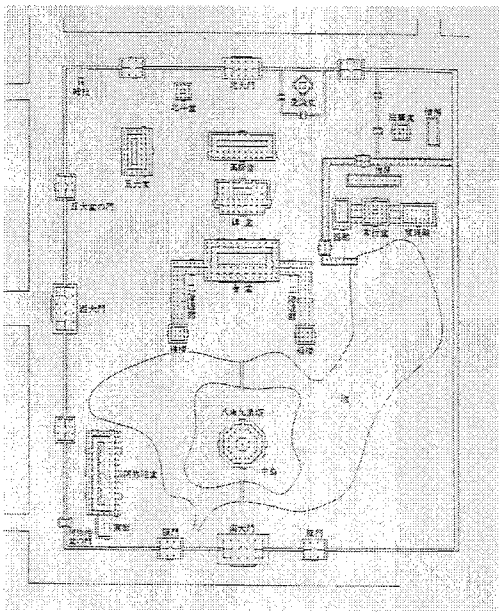
六勝寺については、西田直二郎「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』大正14年(1925)に、動物園南半が法勝寺跡であること及びその概要が報告されている。しかし、六勝寺跡の発掘調査は、昭和34年(1959)の京都会館建設に伴う尊勝寺跡の発掘調査からで、その後に行われた京都市美術館収蔵庫(敷地北東)建設に伴う円勝寺跡発掘調査以後、法勝寺跡・尊勝寺跡・最勝寺跡・延勝寺跡・白河南殿跡などの推定地から建物跡や溝跡・庭園跡や汀跡なども見つかり、その多くの発掘調査を指導された杉山信三博士(1997年没)により六勝寺の復元が進められ、現在では、おおよその推定場所が明らかになっている。ただし、白河街区全体の区画など、まだ明らかになっていないことも多い。

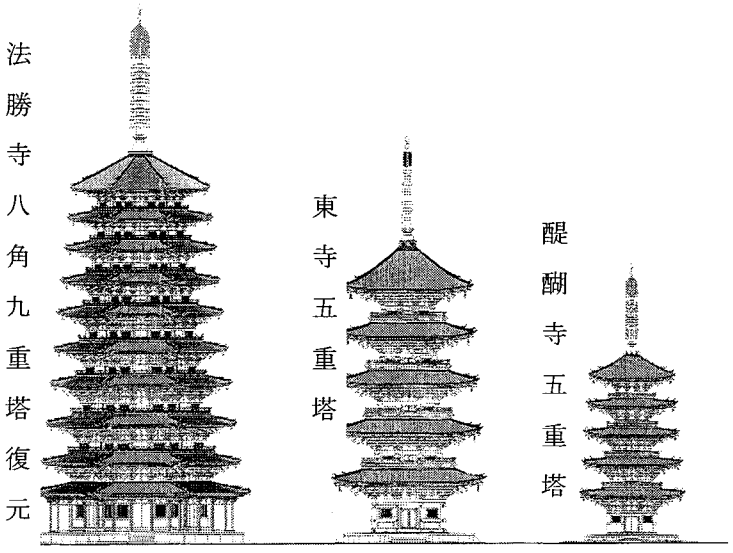
(1)法勝寺(左京区岡崎法勝寺)

鴨東白河の土地を左大臣藤原師実が白河天皇に献上、御願寺として最初に創建されたのが法勝寺で、「法勝寺金堂造営記」によると「件所故宇治前大相国累代之別業也、左大臣伝領、被献公家也」とあり、この地は藤原氏累代の別業(別荘)で、平等院を建てた藤原頼通の別業「白河院」でもあった。

承保2年(1075)6月13日事始(造営着手)、2年後の承暦元年(1077)12月18日に落慶供養が営まれ、金堂・講堂・阿弥陀堂・五大堂・鐘楼・経蔵・僧坊・北大門・西大門・南大門・釣殿御所、北・西・南は築垣、東は白川の堤などが整備された。その6年後、永保3年(1083)10月1日に八角九重塔・薬師堂・八角堂が落慶供養され、さらに応徳2年(1085)8月29日には常行堂も落慶供養、天仁2年(1109)には法華堂・円堂・曼荼羅堂、保安3年(1122)には小塔院も建立され、六勝寺筆頭寺院として大伽藍を誇った。因みに鹿ケ谷山荘事件(1177)に加わった後白河法皇側近の俊寛僧都は、この法勝寺の執行であった。

金堂基壇の規模は、発掘成果から東西約56m、南北約30mと、奈良東大寺の大仏殿(現存建物正面57.5m、奥行き50.5m)の桁行に近い規模で、金堂からは左・右に回廊がL形に延びて先端にはそれぞれ鐘楼・経蔵が建ち、その南には池があって、池の中島には巨大な八角九重塔が聳えていた。この塔は、承元2年(1208)に落雷で焼失し、栄西(1141～1215)が大勧進になって5年後に再建、そのときの塔の高さは27丈と『院家雑々跡文』に記載(1340 年)があり、創建当初の高さは81m、あるいはそれ以上とみられ、現在の20階建てビル以上に相当する巨大な塔であった。その後も塔は、地震や雷・大風等により何度も被害を受け、その都度修復されたが、南北朝時代の暦応5年(1342)3月20日の火災で寺の南半分が焼失





左図は清水擴氏復原の法勝寺復元図。 塔の大きさの比較。富島義幸「法勝寺八角九重塔の復元について」(『京都市内遺跡発掘調査報告』平成22年度、京都市文化市民局)2011年3月、より部分加筆転載。

した。このときの火災について『太平記』には、寺の近くにあった民家の火災の飛び火が塔の檜皮屋根に燃え移り、法勝寺伽藍大半が焼失する壊滅的な被害となったと記述されている。

それ以後、衰退し、15世紀後半の応仁文明の乱以後廃絶して旧境内地は田畑に化したと考えられる。

近代に入って、明治36年(1903)4月1日に動物園が法勝寺跡の南半に誕生したが、太平洋戦争後の1945 年、美術館がアメリカ軍第 58 通信大隊に接収された際、それに必要な駐車場確保のため、動物園敷地南側の約 4000 坪が接収され、それまで小高い土壇状に残っていた八角九重塔基壇跡が4月26日～5月19日の間にブルドーザーで削平されてしまい、跡地は不詳となってしまった。

法勝寺の規模は、東西二町(約240m)、南北四町(約480m)と推定されるが、まだ正確な四至確定には至っておらず、京都市動物園は法勝寺伽藍跡のほぼ南半に当たると考えられている。現在、動物園北の二条通北側に2mを越す石垣の高台(東西約68m・南北約27m)が残り、これが法勝寺の金堂基壇跡である。

法勝寺跡の発掘調査は、昭和47年(1972)に動物園内東北の爬虫類館建設に伴い実施された池汀跡の発掘調査、昭和50年(1975)には、二条通り北側の金堂基壇跡西端に当たる高台上の民家が火事で焼失、その跡地の発掘調査により、高台が金堂基壇の跡であることが明らかとなり、その後、東翼廊(東軒廊(ひがしこんろう)と回廊跡の一部)も検出されている。

そのほか、動物園の獣舎建て替え工事などに伴って多くの発掘調査が行われている。平成22年(2010)の動物園改修工事に伴って実施された八角九重塔跡の遺構確認調査(5～7月)では、一辺13m前後もある、巨大な八角塔基壇下の地業跡(面積約750㎡・因みに東寺五重塔基壇は324㎡)が初めて確認され、これまで検出された金堂跡及び東翼廊跡ともに、法勝寺を復元する上で重要な調査成果となった。さらに動物園では、様々な改修工事に伴って、事前に遺跡調査が進められている。

(2)尊勝寺(左京区岡崎最勝寺町・西天王町)

堀川天皇(1079～1107)の御願寺である尊勝寺は、康和4年(1102)供養、『中右記(ちゅうゆうき)』などの文献から、推定方二町の広大な境内に、南大門・中門・回廊・金堂・講堂・薬師堂・五大堂・灌頂(かんじょう)堂・曼荼羅(まんだら)堂・東塔・西塔・鐘楼・経蔵・法華堂・准胝(じゅんてい)堂など、多くの堂宇があったことが分かっている。

1959 年の京都会館建設時、杉山信三博士らが中心になって六勝寺跡で最初の発掘調査が実施された。当時はまだ発掘調査が一般に周知されていない時代で、府教育委員会の斡旋で京都市文化局へ調査の申し入れがされ、建設工事と平行して発掘調査(第一次発掘調査、昭和34年1月7日～2月 20 日・第二次発掘調査、4月16～25日)が行われた。

その成果は『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第10冊)昭和36年(1961)に「尊勝寺跡発掘調査報告」として詳しく報告されている。

この発掘調査は、建設の基礎工事を進めながらの極めて困難な調査であったが、建物跡3棟、溝跡・井戸跡などが検出され、大量の平安時代後期の瓦や土器が出土した。現在のところこの調査の検出遺構は、東塔跡・金堂と中門を結ぶ口字形の回廊跡と推定されている。その後に行われた同寺推定域跡の調査では、阿弥陀堂・観音堂・法華堂・准胝堂・東塔・西塔などの推定建物跡や西限・東限溝跡などが確認され、六勝寺中では最も調査が進んでいる寺跡である。

(3)最勝寺(左京区岡崎最勝町)

鳥羽天皇(1103～1156)の御願寺として創建、尊勝寺の東側、二条大路の北側に元永元年(1118)12月 17 日、鳥羽・白河両天皇の行幸を仰いで落慶供養が行われたのが最勝寺である。

文献からは、金堂・薬師堂・五大堂・塔・南大門などの堂宇があり、その推定場所は岡崎グランドの西側から神宮道を越えて京都会館までの間、方一町(120m四方)規模の寺院であったと考えられている。

発掘調査では、岡崎グランド(地下駐車場)建設前や北側の冷泉通りや平安神宮南の冷泉通り及び南方の神宮道での埋設管工事に伴う発掘調査等で、築地跡や建物の雨落溝跡などが見つかっている。

(4)円勝寺(左京区岡崎円勝寺町)

法勝寺と最勝寺とに隣接する場所に、鳥羽天皇中宮待賢門院(藤原璋子・1101～1145)の御願寺で、大治3年(1128)3月13日に落慶法要が営まれたのが円勝寺である。その規模は方一町規模かそれ以上とみられ、推定場所は現在の京都市美術館の敷地が、ほぼその位置にあたると推定されている。

堂宇は、東(三重塔)・中(五重塔)・西(三重塔)の三つの塔が東西に並び建ち、金堂(中央精舎)・五大堂・九間飛甍・六時堂・二階門・築垣・西門・鐘楼などあって、六勝寺中唯一の女院御願寺であった。

発掘調査は、昭和45年(1970)に行われた敷地北東の収蔵庫建設前の発掘調査で、大量の瓦溜めや塔跡と見られる建物遺構も見つかっている。

(5)成勝寺(左京区岡崎成勝町)

崇徳天皇(1119～1164)の御願寺で、藤原定家の『明月記』に「三条東行、延勝寺南門大路北行、件南門前東折、自成勝寺西出…」とあり、現在のみやこメッセのある敷地が、ほぼその推定地に当たる。

保延5年(1139)10月26日に落慶供養が行われ、方一町または東西二町と推定される境内地には、金堂・経蔵・鐘楼・南大門・東門・西門・北門・回廊などの堂宇が建立され、以後も、五大堂・観音堂・惣社・宝蔵などが造られたが、塔の記載がない。

この寺は、保元の乱で後白河天皇と対立して讃岐国(香川県)に流された崇徳院の御願寺であり、その怨霊を慰撫するための御八講法要が行われている。

この寺も他と同様に、応仁・文明の乱により衰退し、廃絶に至ったと考えられている。みやこメッセの建設前に発掘調査が実施されたが、既存の勧業館基礎の撹乱などにより、溝跡や井戸跡など以外に有力な遺構は検出されていない。

(6)延勝寺(左京区岡崎円勝寺町・成勝町・北門前町)

二条大路南で成勝寺の西隣にあったのが延勝寺で、近衛天皇(1139～1155)の御願寺である。現在の「みやこメッセ」敷地西端から東大路通りを西に越えた辺りまで東西二町、南北は一町規模と推定されている。久安5年(114)3月20日に落慶供養が行われ、堂宇は、金堂と東西回廊・塔・南大門・東門・西門・北門・一宇金輪堂などのほか、後に「近衛殿寝殿」を移築して阿弥陀堂も造営されている。

これまでに疏水の西側で、建物基壇基礎地業跡や庭石、井戸跡などが検出されている。

(7)得長寿院(左京区岡崎徳成町)

得長寿院は、鳥羽上皇(1103～1156)の御願寺の一つで、南北二町・東西一町規模とみられ、東大路二条上る(現在の川端警察署)付近にあったと推定しているが、これまで有力な遺構は検出されていない。

建物は、平清盛の父である忠盛の造進で、長承元年(1132)に完成した。建物は現在の蓮華王院(三十三間堂)と同じ南北三十三間の大規模建造物で、六丈の観音像を中央に、その左右に等身大の聖観音千躰(一躰ずつ胎内に一千の小仏を納めた)を安置されていた。

寄進した忠盛は、その功績により内裏昇殿(五位以上)を許され殿上人となり、平家栄達の魁となったことは『平家物語』に詳しい。しかし、武士である忠盛が殿上人になったことを憎んだ公卿たちが闇討ちを企て、これを知った忠盛は、平氏は武家の誉れと、銀箔の木刀を持って参内し、公卿たちを脅して暗殺を防ぎ、鳥羽上皇はこれを誉めたという。

この建物は建立後53年目の元暦2年(1185)7月9日の大地震で倒壊し、以後は再建されなかった。その後、平清盛は、父の遺徳を偲び東山七条に蓮華王院{三十三間堂{建長元年(1249)に焼失し、文永3年(1266)再建が現存}を建立している。

(8)白河南殿(左京区聖護院蓮華蔵町)

白河泉殿や白河御所とも呼ばれ、大僧正覚円(1031～98)の房舎であったものを、白河上皇(1053～1129)の院御所に改められ、後に設けられた北殿に対し、南殿や南本御所とも称された。創建は嘉保2年(1095)頃、その後、永久2年(1114)には阿弥陀堂、大治5年(1130)には三重塔が創建され、天皇の居

所である御所と御堂を兼ねていた。平清盛の祖父正盛(まさもり)は、この南殿の中に蓮華蔵院を建立して丈六の阿弥陀像九躰を安置している。推定場所は、得長寿院の西、二条大路北の二町四方の規模と考えられ、夷川ダム事務所の発掘調査で阿弥陀堂跡とみられる遺構や、疏水の南でも建物跡が見つかっている。

(9)白河北殿(左京区聖護院蓮華蔵町・川原町)

白河北殿は、元永元年(1118)に白河南殿の北側に白河法皇(1053～1129)の院御所として造られ、南本御所に対して北殿、北新御所と称された。その規模は二町四方(約250m四方)と推定されている。大治4年(1129)に拡充されたが、同年7月に法皇は崩御、天養元年(1144)5月9日に焼失、すぐに再興されて鳥羽法皇の遷御があった。平清盛の父忠盛は、北殿再興に功があったため正四位下に叙されている。

その後は上西門院(1126～89)の御所となっていたが、保元元年(1156)7月 2 日に鳥羽法皇が崩御、その月の 10 日には鳥羽の田中殿から崇徳上皇(1119～64)がここに移り、藤原頼長らが軍勢千騎を集め上皇方の本拠となったため、平清盛らの後白河天皇方の軍勢による夜襲で全焼した。

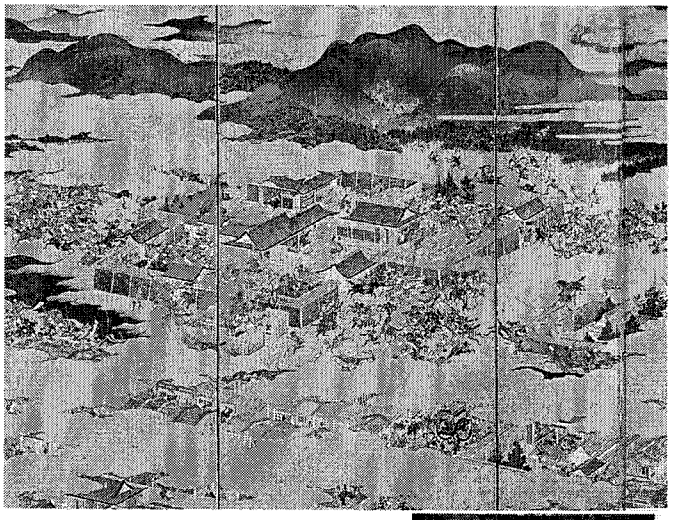
【保元(ほうげん)の乱】保元元年(1156)7月に鳥羽法皇が崩御、その不穏な情勢のなか、崇徳上皇が鳥羽殿(田中殿)よりこの北殿に慌しく遷御され、藤原頼長・藤原教長のほか、清盛の叔父にあたる平忠正らを含め約 1 千余騎の兵で門などが固められた。

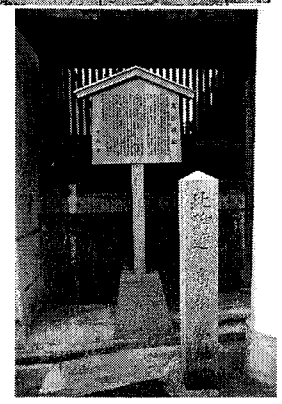
一方の後白河天皇方の高松殿には、源義朝・源義康のほか平清盛らが続々と招集され、7月 11 日の未明、清盛率いる300余騎をはじめ約600騎が白河北殿に向かい、寅の刻(午前4時頃)に戦闘が開始された。このとき、池禅尼が崇徳上皇の子である重仁親王の乳母だったため、清盛は難しい立場であったが、一門の結束につとめたとされる。後白河天皇は、高松殿の隣にある東三条殿に神鏡剣璽とともに遷御、源頼盛がその警固を担当した。戦闘では北殿西隣の藤原家成邸に放火された火が北殿に燃え移って上皇方は総崩れ、結果、崇徳上皇は秘かに北殿を脱出、鹿ケ谷から如意寺を越えて近江を目指したが、途中で逃亡を諦め、13 日には仁和寺へ出頭、その後、同月 23 日には讃岐へ流された。この軍功により清盛は播磨守に補任されている。

(10)　平 清盛(1118～1181)

伊勢平氏の棟梁、父平忠盛の嫡子(白河院のご落胤との説もある)で平氏棟梁となり、保元の乱(1156)で後白河天皇の信頼を得る。次の平治の乱(1159)では最終的な勝利者となり、武士では初めて太政大臣に任ぜられる。娘の徳子を高倉天皇に入内させ「平氏にあらずんば人にあらず」と言われる時代を築いた→平氏政権の時代。平氏の権勢に反発した後白河法皇と対立し、治承三年の政変(1179)で法皇を鳥羽殿に幽閉し、徳子の子、安徳天皇を擁して政治の実権を握る。

しかし、平氏の独裁は貴族・寺社・武士などから大きな反発を受け、源氏による平氏打倒の挙兵がなか、熱病により 64 歳で没した。その後、平氏は都を逃れ元暦2年(1185)の壇ノ浦の戦いに敗れて滅亡した。





上は『保元・平治の乱合戦図屏風「白河殿夜討」(江戸時代) メトロポリタン美術館所蔵 (wikipedia より転載)
右は高松殿跡の駒札と石柱
(姉小路通釜座東入北側)

法勝寺略年表

年号	西暦	月日	事項	出典
承保2	1075	6月13日	法勝寺の造営を開始する	法勝寺金堂造営記
承保2	1075	7月11日	白河御堂の木作りを始める	法勝寺金堂造営記
承保2	1075	7月19日	基壇を築き始める	法勝寺金堂造営記
承保2	1076	7月23日	礎石を据える	中宮一品記
承保2	1075	8月13日	白河御願寺の棟上げを行う	法勝寺金堂造営記
承保3	1076	6月13日	阿弥陀堂の木作りを始める	法勝寺金堂造営記
承保4	1077	8月27日	仏像を金堂・講堂に納める	法勝寺金堂造営記
承保4	1077	10月23日	白河御願寺の供養日を定める	水左記
承保4	1077	12月18日	**法勝寺落慶供養**(七間四面瓦葺金堂・七間四面瓦葺講堂・十一間四面瓦葺阿弥陀堂・五間四面瓦葺五大堂・一間四面二階瓦葺南大門・そのほか大門・回廊・鐘楼・経蔵・僧坊等)	扶桑略記
永保元	1081	8月25日	**八角九重塔の壇を築き始める**	水左記
永保元	1081	8月26日	塔・薬師堂・法華堂の地鎮を行う	水左記
永保元	1081	9月27日	塔の礎石を据える	水左記
永保元	1081	10月27日	塔の心柱を立てる	水左記
永保3	1083	10月1日	**九重塔・薬師堂・八角堂の落慶供養**	法勝寺御塔供養咒願文
応徳2	1085	7月10日	常行堂の上棟を行う	為房卿記
応徳2	1085	8月19日	常行堂の地鎮を行う	為房卿記
応徳2	1085	8月29日	常行堂の落慶供養。	帝王編年記
寛治5	1091	8月7日	**地震により九重塔・愛染堂・常行堂などが被害を受ける**	扶桑略記
嘉保2	1095	11月17日	九重塔の修理で心柱が上げられる	中右記
承徳2	1098	10月23日	**九重塔の修理完成**	中右記
天仁2	1109	2月27日	北門の近くに瓦葺一間四面の北斗曼荼羅堂を新たに造る	江都督納言願文集
永久元	1113	6月17日	塔に雷が落ちる	殿暦
保安3	1122	4月23日	五寸塔３０万基を供養する	百錬抄
保安3	1122	12月15日	御堂を一棟造り，４月に供養した小塔を納める	百錬抄
保延6	1140	11月14日	九重塔の心柱の根元が２尺ほど湿気により腐朽する	中右記
嘉応元	1169	11月12日	九重塔の第三層に落雷	百錬抄
承安4	1174	7月20日	九重塔に落雷　仏像・柱が破損する	百錬抄
安元2	1176	3月1日	九重塔の第九層に落雷。下にいた二人が死亡する	百錬抄
元暦2	1185	7月9日	大地震により九重塔・阿弥陀堂など破損する	山塊記
文治3	1187	7月3日	九重塔の修理が完成する	玉葉
建仁3	1203	5月27日	８万４千基の塔を供養する	百錬抄
承元2	1208	5月15日	**九重塔落雷により焼失する**	百錬抄
承元2	1208	10月14日	九重塔の再建に着手する	百錬抄
承元4	1210	7月16日	九重塔の心柱を立てる	百錬抄
建暦元	1211	3月20日	九重塔の第六重の柱を立てる	百錬抄
建保元	1213	4月26日	**九重塔が再建される**	百錬抄
安貞2	1228	9月29日	宝蔵に盗賊が入り焼失する	百錬抄
安貞2	1228	10月7日	暴風で九重塔の九輪破損する	百錬抄
天福元	1233	10月4日	円堂に盗賊が入り火をつける	百錬抄
寛治元	1247	8月28日	阿弥陀堂が焼亡する	百錬抄
建長3	1251	8月3日	阿弥陀堂の棟上げを行う	百錬抄
建長5	1253	12月22日	阿弥陀堂が再建される	百錬抄
建長7	1255	8月28日	九重塔に落雷	百錬抄
文永5	1268	6月5日	九重塔に落雷	吉続記
弘安9	1286	4月26日	九重塔に落雷	勘仲記
暦応5	1342	3月20日	**阿弥陀堂・金堂・講堂・九重塔・南大門など焼ける**	続史愚抄
応仁2	1468	8月4日	兵火によって法勝寺・聖護院共に焼ける	碧山日録
享禄4	1531	1月11日	法勝寺放火により焼失	二水記